

ヘスター・プリンの変貌

元田, 脩一

<https://doi.org/10.15017/2332736>

出版情報 : 文學研究. 72, pp.219-229, 1975-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

ヘスター・プリンの変貌

元 田 脩 一

1

ヘスター・プリンの精神的変遷過程は、彼女がディムズデイルと姦通を犯したときから晒し台の刑罰を受けたときまでを原点とした場合、以後次の四つの段階に区分することができる。第一の段階は、彼女が自分の「衝動的熱情的性質」(七八)¹を抑制して、悔悟と贖罪の生活に入ったときに始まり、第二の段階は、彼女が「自己任命の慈悲の修道女」(一九五)として世間から受け入れられ、胸の緋文字が Able の意味を獲得し、「彼女の生活が熱情と感情から大きく思索へと変わった」(二九八―九)時期であり、第三の段階は、彼女がディムズデイルとの逃亡を決意したときから、彼の死にあい、海外に姿を消したときまでであり、第四の段階は、彼女が再び汚辱の地を踏み、「緋文字の隠者」(三〇九)として懺悔の余生を送った時期である。

このヘスターの精神的変遷過程は、起承転結の段階を踏んでいるということができるが、注目すべきことは、この過程が終始彼女のディムズデイルに対する愛情によって貫かれているということである。姦通という重罪を犯したのももとより、いかなる訊問に対しても相手の名をあげて拒否しつづけたのも、贖罪の苦行をあえて汚辱の土地

で始めたのも、ついでディムズデイルとの逃亡に踏み切ったのも、息絶えんとする彼とともに死を願ったのも、そして最後にその受難の地に立ちかえり、再び緋文字を身につけたのも、ディムズデイルに対する彼女の不変の愛情をぬきにしては考えられないことなのだ。

ホーソンは、ヘスターが晒し台に立たされたのちもその断罪の地を去りかねた理由として、次のような説明を与える。

そこには、彼女が一体となって結びついていると思う人が住み、そこを歩いていたのだ。その結合は地上においては認められないにしても、二人を最後の審判の法廷に立たせ、その法廷を永劫の責苦をともにする未来のための結婚の祭壇とするように彼女には思われたのだ。……彼女はその考えにまともに相対したことは殆どなく、急いでそれをもとの土牢に閉じこめたものだ。彼女が自分に無理に信じ込ませようとしたことは——ニュー・イングランドの住民として住みつつける動機として究極的に理由づけたことは——半ば真実であり、半ば自己欺瞞であつたが、彼女は自分にいいきかせた、これは自分が罪を犯した場所である、だから、ここがこの世で罰を受ける場所でなければならぬ、そうすれば多分、日々の恥辱の呵責によって、遂には自分の魂は浄められ、既に失ってしまったものとは違った清らかさが、受難の結果であるがゆえに一層聖者のような純潔さが生み出されるだろう、と。

(一〇三四)

このヘスターの意識的な動機づけが「半ば真実であり、半ば自己欺瞞であつた」のは、その底にディムズデイルに対する彼女の断ちがたい愛情が隠されていたからにはかならない。しかし、だからといって彼女は、ディムズデイルがポストンにいるがゆえに自分もそこにとどまって「懺悔のまねごと」(一八〇)をしようとしたわけでは決してない。誤解してはならないことは、ヘスターがJ・C・スタブズのいうような「制約されない人間の情動」の象徴としての役割を果たし、社会に対して反抗的挑戦的な態度をとつたのは、彼女が姦通を犯したときから晒し台に立たされたときまでの原点の時期であつて、この時点におけるヘスターは、罪の意識におののき、彼女を姦通に走らせた自分

の情欲と不羈奔放な性格に対して極度の恐怖を感じていたのである。

来世におけるディムズデイルとの結合という彼女の切なる秘密の願望できえも、彼女はそれを「魂の誘惑者」(二〇三)たる悪魔の指嚇と感じて、「それが穴から出る蛇のように彼の心から腕き出るときはいつも蒼白となった」(二〇三)ということは、彼女が自分の犯した姦通に關していかに深い罪悪感に怯えていたかの証左といえよう。また、その姦通のために彼女には「他人の胸に秘められた罪に対する感応力」(二一〇—二一一)が芽生えて、高德敬神の人々や純潔無垢の乙女にさえ、隠された情欲の焰の揺らぐのを見る思いがする。だが、それにもかかわらず、彼女は人間の本质を悪と信じた魔女ヒビンスの仲間にもならず、グッドマン・ブラウンのように陰鬱な疑惑を抱くこともない。それどころか、彼女はその「秘められた罪に対する感応力」を悪魔の影響と感知して身震いし、「自分のように罪深いものは人間の仲間にはいないと信じようと努めた」(二一一)のだ。そのことは、彼女が自分自身の情欲に対していかに強い恐怖感を抱いていたかを物語っているといえるだろう。

さらにまた、不義の子であるパールの性質についてのヘスターの危惧を考慮に入れなければならない。

彼女は自分のした行為が邪悪なことであることを知っていた。だから、その結果が善になるだろうとは到底信ずることができなかった。彼女は日ごと、その子の伸び聞く性質を恐怖をもって眺め、その子の存在の原因となったあの罪と符合するような、暗い無法な特質が見つかりはしまいかと絶えず恐れるのだった。(二一三—四)

そして彼女は、「自分の狂暴で自暴自棄で挑戦的な気分や気まぐれな氣質」(二一五)がパールに受けつがれているのを知ったとき、「笑っている小さな悪魔の姿」(二二三)をパールの顔に見出すのだ。自分自身の不羈奔放な性格に対するヘスターの恐怖が、このパールの性質についての彼女の危惧を生み出していることはいうまでもないだろう。このように、ヘスターが姦通を犯した結果罪悪感に怯え、自分の秘められた情欲と不羈奔放な性格に恐怖を感じた

ということとは、彼女が神に対する罪を痛切に意識したということであり、それまで以上に信仰心を深めたということにはかならない。そのことは、彼女が悪魔の誘惑を鋭敏に感知し、それを必死に拒否していることでも明らかであり、パールが三歳になったときまでには「ニュー・イングランド児童用教科書やウエストミンスター教義問答の第一欄についての本式の試験にたえられるほどの」(二三八) 神に関する知識をその幼い子供に教え込んでいることでも、そのことは明らかであるといえるだろう。

が、ヘスターは不義の子を生み、社会の苛酷な弾劾を受けることによって、神に対する罪の意識に苦悶しただけではない。「宗教と法律が殆ど同一であった」(七〇) ピューリタンの神権体制のもとでは、神の掟は社会の戒律であり、神の懲罰が即社会の刑罰であったがゆえに、ヘスターは神に対してのみではなしに、社会に対してもまた強度の自責の念にさいなまれていたに違いないのだ。彼女が——意識下にディムズデルに対する憧憬を潜めていたとはいえず——緋文字の烙印を担わねばならないその世における贖罪の場と考え、恥辱の呵責を甘受して忍従の生活を始めたということは、神と社会に対する罪の意識なしにはありえないことなのだ。ヘスターにピューリタン体制に対する批判の目が生まれたのは、彼女が贖罪を達成したと信ずるようになったのと同じ時期であり、それは彼女の精神的変遷過程の第二段階の終わりの頃にあたり、この第一の段階においてはJ・C・ガーバーの「ヘスターは神に対して……社会に対して、自分が罪を犯したとは感じていない」という見解は、見当違いも甚しいといわねばならないのである。

したがって、この段階におけるヘスターにとって胸の緋文字は、彼女に悔悟と贖罪を要求する神と社会の制裁であると同時に、彼女が自己の魂を浄化するための、自分の情欲と不羈奔放な性格を抑制するための自戒の道具であったのだ。彼女はそれ自身をつけることによって、人々の侮蔑と嘲笑と愚弄に対する忍従と欲望拒否の生活に入ったのである。そして、彼女の唯一の生計の手段である針の技芸でえた僅かな金で貧者への慈善をおこない、「彼女の愛情の

対象」(二二七)であるとともに「罪と呵責の表象」(二二七)でもあるパールの養育に努めながら、悔い改めの苦行を つづけたのだ。

2

ヘスターの精神的変遷の第二の段階は、その悔い改めの苦行が明確な成果となってあらわれた時期である。

彼女は決して世間と戦うことはなく、その最もひどい仕打ちに対しても不平をいわずに従った。彼女は自分の受ける苦しみの償いとして世間に何かを要求することはなかったし、同情を強いることもしなかった。それにまた、彼女が除け者にされて恥辱の日々を送っていたこれまでの年月のあいだの、彼女の生活の潔白清浄さが世間の好意をうるのに大いに役立った。……貧しい人が必要とするときはいつでも、彼女ほどすぐさま自分の乏しい貯えを分け与える人はいなかった。……疫病が町に蔓延するときには、ヘスターほど献身的に尽くすものはいなかった。実際、社会一般の災難であれ、個人的なそれであれ、災難の起ったときには、この社会の除け者はすぐに自分の務めを見出したのだ。(一九四―五)

かつては彼女の犯した罪の表象であった緋文字は、今は「その後の彼女の多くの善行」(一九七)をあらわすものとなり、「女性の脆さと罪深い情熱」(二〇二)を象徴していたものが、一転してAbleの意味をあらわすものに変わってしまい、今やその緋文字は「自己任命の慈悲の修道女」となったヘスターの胸で聖なる「十字架の効力」(一九七)を発揮するまでになっているのだ。かつて彼女がその緋文字をつけることを強制されたとき、それはピューリタン社会における彼女の存在許可証であったが、今ではそれが彼女の *raison d'être* となっているのである。

しかしながら、七年間の悔い改めの苦行が惹起させたものは、彼女の性格と社会的役割における変化だけではない。彼女の容姿からは熱情的な女性としての豊潤な美は消え失せて、大理石の彫像のような冷たさと威厳がそれにとって代わったのである。もはや彼女は「かつて女であったが女であることをやめてしまった人」(一九八)であり、「

思考の自由を身につけた」(一九九) 思索の人であり、ピューリタン体制の批判者でもあったのだ。

ヘスター・プリンは生まれつきの勇氣と活動心をもっていて、長いあいだ社会から疎外されていたばかりではなく、追放もされていたので、牧師(デイズデイル)には全く縁のないような自由な考え方に慣れていたので。……この数年間、彼女は疎外者としての観点から人間のさまざまな制度や、牧師や立法者たちが確立したものを眺めていて、ちょうどインデアンが、牧師の帯、法衣、晒し合、絞首台、炉辺、あるいは教会などに対して感じると同じ程度の尊敬しか抱かずに、それらのすべてを批判したのである。(二三九)

そして、ヘスターがこのような変貌を成し遂げたとき、自己の贖罪の完了という確信が彼女に生まれたのである。その証拠に、判事会議が彼女の緋文字をとりはずすべきかどうかを議題にしたとチリングワースから告げられたとき、「わたしにそれをはずしてよい資格ができたならば、それはひとりでに落ちるか、あるいは違った意味をあらわすものになるでしょう」(二〇四)と彼女は答えているが、緋文字が「Able」を意味すると人々がいつていた」(一九六)ことや、それが人々のあいだで「彼女の多くの善行」のしるしと見做されていることを彼女が知らないはずはないのだから、彼女は自分の贖罪は既に終わったと考えていたに違いないのだ。また彼女は、秘密の罪の呵責のために憔悴しきったデイズデイルに対して、次のように彼の罪障の消滅を説く。

あなたは深く厳しく悔い改めをなさってきました。あなたの罪は過去のもので、遠い昔のことなのです。あなたの今の生活は、人々の目に映っているのと同じように、実際に神聖なものなのです。善行によってどのように確認され証明された悔い改めが、空しいとおっしゃるのですか？(二三〇)

いかに悔い改めの苦行を重ねてきたにせよ、罪の告白をしていないデイズデイルに贖罪の完了を認める以上、緋

文字の呵責を耐えぬいてそれを一種の十字架に変えたヘスターが、自分自身の罪障消滅を信じないはずはないだろう。そのとき彼女が自分たちの姦通をふりかえていった著名な言葉——「わたしたちがしたことは、それ自体神聖なものをもっていたのです」（二三四）——は、社会の苛酷な刑罰を受けて自分たちの犯した罪の深さに戦慄した彼女が、その罪を贖い終えたと確信したときに、そしてまた、ピューリタン体制に対する批判の目を開いたときに、初めて口を突いて出る評言といえるのである。

3

したがって、心身ともに衰弱しつくしたディムズデルがヘスターに救いを求めたとき、彼女が自由の世界への逃亡を彼に勧め、彼との同行を受諾したのは、いとも当然の成り行きであって、「追放と恥辱の七年の全期間は、まさしくこの時のための準備にほかならなかった」（二四〇）といっても決して過言ではないのである。かつては、そこが彼女の罪を犯した場所であり、そこにディムズデルが住んでいるがゆえに、そこを悔い改めの地とした彼女が、今や贖罪を終え、ディムズデルとともにそこを去ることを決意したのだ。その瞬間、彼女の精神的変遷は第三の段階に達したのである。

そのとき彼女が帽子をとると、光沢のある黒髪が垂れ下がり、「彼女の女らしさと若々しさと彼女の豊潤な美のすべてが、いわゆるとりかえしのつかない過去から甦り」（二四三）彼女は優雅な女性の魅力をとりもどすのであるが、それは彼女がかつての衝動的で奔放な女性にたちもどったというわけではない。この段階におけるヘスターは、原点における彼女とは違い、「慈悲の修道女」としての役目を果たし、神と社会に対して罪を贖い、母親としての愛と苦しみを知り、思索の自由とピューリタン体制に対する批判力を身につけて生まれ変わった新しい女性なのだ。

しかし、この新しい女性として再生したヘスターを待ち受けていたものは、ディムズデルの変心と死である。ま

さに息絶えんとするディムズデイルにヘスターは「確かに、確かに、わたしたちはこの苦惱のすべてをもつて、お互の罪の贖いをしたのです！」(三〇三)といい、来世での永遠の結合を願う。が、それに対してディムズデイルは次のように答えるのだ。

わたしたちが破った掟！ ここにこのように恐ろしくもあらわれた罪！ これらのことだけを念頭において欲しい！ わたしはこわいのだ！ 恐ろしい！ 多分わたしたちが神を忘れたとき——お互に相手の魂に対する敬愛を侵したとき——そのときから、わたしたちが再び会って永劫純潔の再結合を遂げるといふ希望は空しくなってしまったのだ。(三〇四)

ヘスターが終始一貫してディムズデイルに愛情を捧げ、来世における彼との結合を願いつづけたのに反し、ディムズデイルのこの最後の言葉は、来世での二人の結合の可能性を否定しているだけではなく、ヘスターの贖罪も、彼女の彼に対する愛情も、彼女の人間の成長をも否認しているのである。いいかえれば、ヘスターは彼女が過去七年間にわたって達成した全成果を、この一瞬においてその愛人により蹂躪されたのである。彼女が自由の世界を求めて欧州に脱出したのは、極めて必然的な帰結といわねばならない。

4

だがその後、奇怪なことにヘスターは、結婚したパールを欧州に残して再びボストンの土を踏み、そこで余生を送るのである。しかも、それはただ単に愛と再生の地に対する郷愁のためではなく、悔い改めの行を継続するためであり、帰ってきたヘスターには新しい女性としての面影は微塵もないのだ。

ここは彼女が罪を犯したところであり、悲嘆にくれた場所であり、ここでお彼女は悔い改めをしなければならないのだ。それ

ゆえに彼女はもどつてきて——自分の自由意志で……今まで語られてきたこの暗い物語の象徴を、再び身につけたのだ。その後二度と彼女の胸からそれははずされることはなかった。……そして、ヘスター・プリンには利己的な目的というものは全然なかったし、自分自身の利益や楽しみのために生きるというところも少しもなかったので、人々は悲しいことや困ったことを悉く彼女のところに持ち込み、非常な困難を乗り切ってきた人物としての彼女に忠告を求めたのだ。とりわけ女性たちは……なぜ自分たちをこれほどみじめなのか、どうしたら救われるのかを尋ねるためにヘスターの小屋を訪れたのだ！ヘスターはできるだけその女たちを慰め、助言を与えた。彼女はまたその女たちに、次のように自分の堅い信念を語るのだった。すなわち、この世が成熟してより輝かしい時節となり、神の御意志がそのままおこなわれるときがくれば、男女のあいだの総体的関係を、相互の幸福という今よりももっと確実な基盤の上に確立するための新しい真理が啓示されるだろう、と語るのだった。もっと若い頃にヘスターは、自分こそ天命を受けた女予言者であるかもしれないと空しく想像したこともあったが、今ではとつくのまえから、罪に汚れ、恥辱にうなだれ、終生の悲しみさえ担わされた女に、神聖な神秘の真理を語る使命が託されることはありえないと認めていたのだ。(三二〇—

一)

ここに見られるヘスターの姿は、ピューリタン体制に対する批判を忘れた隠遁者であり、不当な社会的地位に悩む女性たちを、天国の到来という夢物語で慰撫する諦観者であり、罪の絶対性と贖罪の可能性を信じ込んだ固陋なピューリタンである。この「緋文字の隠者」(三〇九)への急変が、ヘスターの精神的変遷過程における第四の段階といわねばならない。しかしながら、このヘスターの最終的な変貌を惹起させた要因は——第三の段階から第四の段階への変遷の動機は——皆目描かれてはいないのだ。彼女は欧州の自由の風潮を実際に体験してみてもそれに幻滅を感じ、死ぬ間際のデイズデイル同様に、峻厳なカルピニズムの信奉者となったと推測するほかはないのである。

だが、ホーソンはこのヘスターの唐突な最終的な変貌の動機づけをおこなっていない——いや、それをすることができなかった——ばかりではない。実のところホーソンは、新しい女性として再生したヘスターに対して非難の言葉を洩らさずにはおれなかったし、また、彼女が社会改革や女権拡張運動に走ることも阻止せずにはおれなかったのだ。

る。

ヘスターがピューリタン社会の疎外者・批判者としての観点から、自由な欧州への脱出こそデイズデイルと彼女の新生のための最善の道と結論したのに対して、「恥辱、絶望、孤独！ 彼らが彼女の教師——厳しい、粗暴な教師だったのだ——そして、それらは彼女を強くしてはくれたが、間違つた多くのことを教え込んだのだ。」（二三九—二四〇）とホーソンはいい、あたかもヘスターの判断そのものが粗暴で常軌を逸した過激なものであるかのようにおわせ、彼女とデイズデイルが新生活への期待に胸を膨らませて森の木陰に寄り添つたときの歡喜に共鳴した自然を、「人間の法律に決して従うことなく、より高い真理によって啓発されることのない、この森の粗暴な異教の自然」（二四三）と述べているのだ。また、ヘスターが彼女の豊かな髪を被い隠した帽子をぬぎ、胸の緋文字を投げ捨てて女性としての美と魅力をとりもどしたとき、ホーソンはパールに反抗させて再び帽子と緋文字をヘスターにつけさせているのである。それだけではない。ホーソンは、ヘスターがピューリタン体制の改革者ないし女権拡張主義者にならないための歯止め役として、パールを設定しているのである。

もしも、小さなパールが聖霊の世界から彼女（ヘスター）のもとにきていなかったとしたら、事態は遙かに変わっていたことだろう。そのときは、彼女は一つの宗派の女性の開祖として、アン・ハッチンソンとあいたずさえ歴史に伝えられたかも知れなかつたらう。彼女はその一面において、女予言者になつていたかも知れない。彼女がピューリタン体制の根底を覆えそうとしたかどで、当時の厳格な法廷から死刑に処せられるということもありえないことではなかつたらう。

だが、彼女の思想的熱狂は、自分の子供の教育にその捌げ口を見出したのだ。神の摂理は、この幼い少女のなかで、女性としての芽と花が多く、の困難を通して発育し開花するよう、その任務をヘスターに与えたもうたのだ。（一九九—二〇〇）

そうすれば、なぜホーソンはヘスターがピューリタン体制の改革者ないし女権拡張主義者となることを阻止し、新

しい女性として再生したヘスターを暗に非難し、その彼女を何らの動機づけなしに固陋なピューリタンに変貌させてしまったのであろうか。それはホーソンが彼の時代の思潮であったロマンチズムに、その文学面における表出である超絶主義と、その社会面における表出である改革運動と女権拡張主義に、共鳴同調することができなかったためにほかならない。一七世紀のヘスターが獲得した「思考の自由」には一九世紀のロマンチズムが投影されており、新しい女性としての彼女の言葉には超絶主義者を思わせるものがあり、ヘスターが参加を阻止された改革運動や女権拡張主義には、ホーソンが中途で脱落したブルック・ファームに見られる改革運動と、彼の義姉のエリザベス・ピーボディの持論であった女権拡張主義という裏地があるのだ。

ともあれ、ロマンチズムという時代思潮に対するホーソンの疑惑と反発が、ヘスターを再び陰湿なピューリタンの社会に押しもどしてしまい、彼女の人物像を曖昧なものとし、彼女がこの物語においてあたかも 'accessory figure'⁽⁴⁾ であるかのような印象を作り出していることは否定しがたい事実といえるだろう。

註

- (1) 以下原作からの引用はすべて The Works of Nathaniel Hawthorne (Standard Library Edition, Houghton, Mifflin and Company) にその頁数を付記した。
- (2) John Caldwell Stubbs, *The Pursuit of Form—A Study of Hawthorne and the Romance*, p. 90 (Univ. of Illinois Press).
- (3) John C. Gerber, "Form and Content in *The Scarlet Letter*," *Twentieth Century Interpretations of The Scarlet Letter*, p. 107 (Prentice-Hall, Inc.).
- (4) Henry James, *Hawthorne*, p. 112 (English Men of Letters, Macmillan).